

街場の就活論 vol. 27

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ
団 遊

就職先を食ベログで選ぶのは、どうしてダメなのですか？

大学でキャリア教育の講師をはじめて8年目になります。わずかな時間ですが、その中でも学生から投げかけられる質問の内容がずいぶん変化してきた印象があります。私が教壇に立つ大学の学生に限った内容かもしれませんが、最近特に多い質問で、考えさせられたものをご紹介します。



質問した彼女は大学2年生です。授業で「仕事は手段であり、大切なのは将来どういう風になりたいかを考えることだ」と言われるたびに、その問いに向き合い、その度に「将来

どうなりたいかを考えたって答えは出てこないのだから無駄じゃないか」「団さんは答えが見つかる必要はなく、考える時間が大切なのだと言うけれど、答えの見つからない問いを本当に考える必要があるのだろうか」と思うのだそうです。

ある日、彼女なりに考えを整理し、相談があると言ってやってきました。そのときに、こんなことを言いました。



- ・私は働く気はある。働くものだと思っているし、働きたいとも思っている
- ・やれと言われたことは、結構きちんとやる方で、ちゃんと結果も出せるタイプだ
- ・アルバイト先でも、リーダーとしてみんなのマネジメントをしている
- ・しかし「やりたいことは何？」とか「人生のビジョン、目標は？」と言われると戸惑う
- ・それが大切だと、先輩や先生は口にするが、それが見つかる気がしない
- ・そもそも、そういうものが本当に必要なのか？
- ・勘違いしないでほしいのだが、働く気はあるし、就職もする。だからそれでいいじゃないか
- ・もし可能であれば、先生や先輩から「君はこういうことしてみれば？」と提案を受けたい
- ・候補をもらえれば、その中から最良を選ぶことはできると思う
- ・「働く理由」や「人生のビジョン」を自力で考えることに今一つ意味を見いだせない
- ・食事に行くときは「食ベログ」を利用する。仕事も食ベログ的に探しちゃダメなのか？
- ・食ベログの情報を鵜呑みにするわけではない。候補があることが大事なのだ
- ・いちから自分で考えても、いいアイデアが生まれると思えない



この考えは、そのとき一緒に授業を受けていた学生たちの大きな支持を受けました。しかし、これを読まれている多くの方は、合理的な考え方である部分を認めつつ、やはり違和感を持たれるでしょう。ぼくなりには、この問いかけに対して思うことを回答しましたが、考え方自体を否定することはできませんでした。

ここにある落とし穴は「最良の結果を最も効率的に手に入れたい」という病ではないかと思えます。大学生たちに、どうすれば「非効率で面倒なことが、全体最適を生むこともある」ということを伝えるか。なかなか難しい課題です。

しかし、そのことを十分に理解しないまま社会に出ると、知恵の回る大人たちに上手く言いくるめられ、人生を捧げることになってしまう、という現代社会の基本構造があります。

大手広告代理店に入社後、わずか半年と少しで自殺した彼女のような悲劇を繰り返さないために、果たして何をどう伝えるべきなのか。どう言えば伝わるのか。上手くいっているときは、何でも構いません。でも上手くいかないと思う時に支えになるのが、「なぜ働くのか」という問いへの、オリジナルな回答ではないかと、ぼくは思います。

文／だん・あそぶ

「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸(実習)にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。